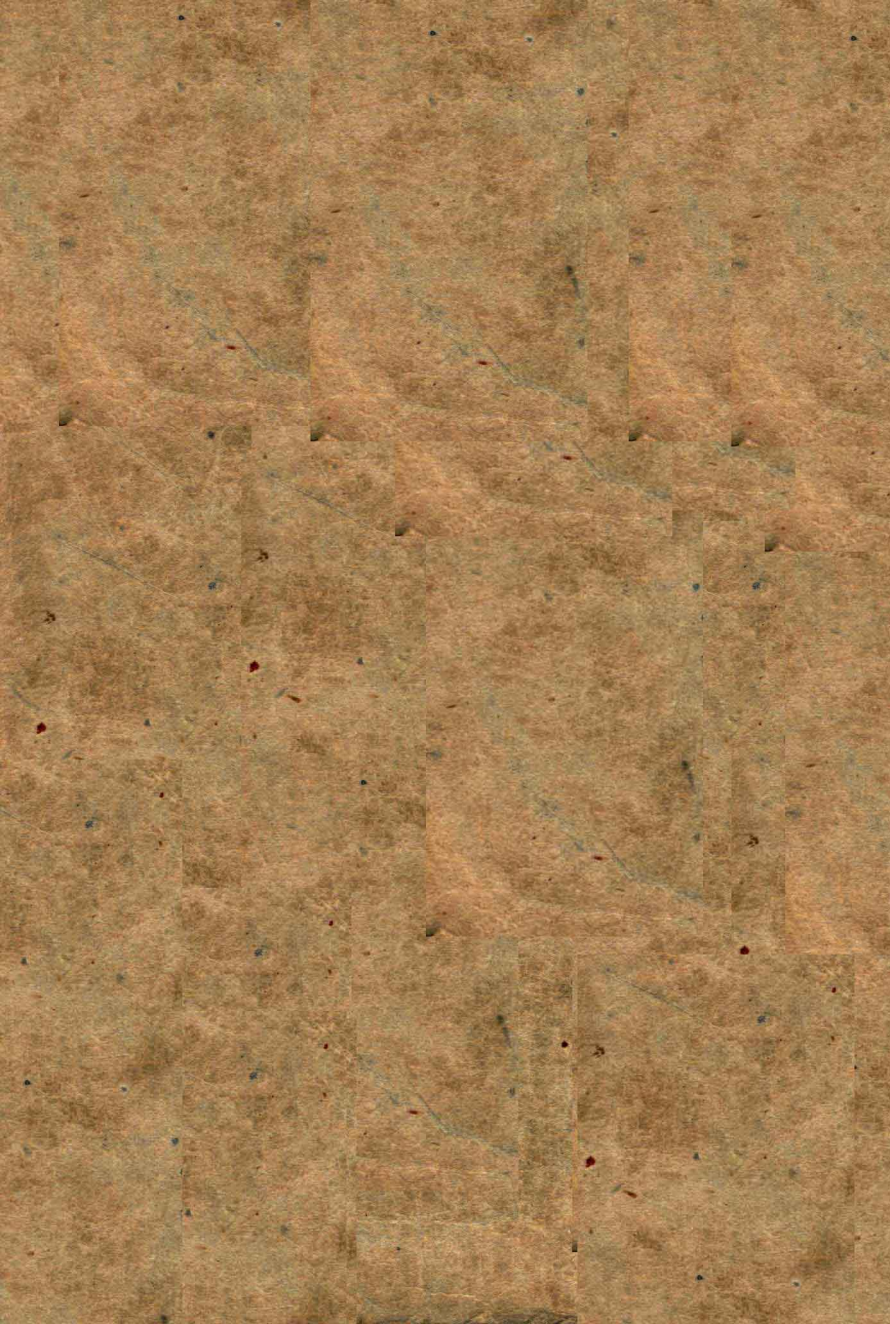




芭蕉全集

上卷

地平社版

芭蕉全集
上卷

昭和二十三年六月五日
昭和二十三年六月十日

編者 勝

發行者 田

東京都港区

印刷者 川

東京都千代田區

發行所 合資
會社

電話
神

振替
東

配給元 日本出版

定價

序

時代といふ大きな熊手は、芭蕉の名さへあれば、そこら、こゝらへ、猿轡を伸して、砂利まじりに掻き込んで、張子の布袋のやうな、肩に呼吸するぽん／＼をふくらました。小判の中の砂利、これが不消化のお腹をこわし、こぢれてはいのち取りの癌となる。今でも遅くない。荒い外科を求めなければならぬ。袋をぶちまけ、砂利を篩にかけてふるひ落す。小判はきらめい一篩に残る。砂利でも、金箔をまぶしてきら／＼光るいかものがあつて、とかく慾の目を晦まして、ふるひ落しきれないのである。齒にかみあてゝ、その唼かさ。振つて、ころがして見て、そのひびきの眞贋、お酉さまのやうな熊手で、又、掻きよせたり、選り分けたり、吟味にざつと三十年はかゝつた譯である。

熊手と小判の寓話的序文を以て、此の道の愛好者へ、今年還暦の内祝ひをふくめて、私の確信あるおくりものとす。微衷の存するところを汲んで、今後とも私を鞭打ち、私を援けて、此の上巻に引つゞき、一日も早く下巻をまとめあげ、兩卷揃つて完成するに到らんことを、ひたすら念願するのである。

昭和二十三年三月廿七日

勝 峯 晋 風

汎例

一、博く搜しても、いたづらに多きを貪り、あやふやなかりき傳へや、口碑に残るものまでを不吟味に、何丸芭蕉句の解説考の如き掻き集めの轍に落ち入つてはならぬ。湖中一葉は慎重にあやまちなきを期したやうでも、まだく残滓を捨てきれないし、一切出典を擧げないから、一抹の不安が漂ふ。本集はそれらの點を考慮し、戒心し、自肅し、充分の用意を以て編纂したことを特色とする。

一、作品の年次は奥の細道や嵯峨日記のやうに、その年の行脚に、その年の閑居に、且つ吟し、且つ呟したもの、眞否をたゞす必要がない。それは直ちに「作」と決定した。その他はその句、その文を收録した芭蕉生前の開板年代により、すくなくともそれより以後でないことの明瞭なものは、その年の「前」であると註し、芭蕉歿後の諸集に見えて、然も信用される作品は、傍證的に推定して、これを「説」と斷つて置いたのである。

一、正しい出典に據つたことを證する爲、引用書名を年次と共に脚註したが、これも芭蕉以前に板行された虚栗や猿蓑、又、奥の細道の如き、自證されるものはたゞその書のみを擧げ、笈日記や陸奥衡のやうに歿後とは云へ、さして年を隔てないもの、かなり遠くなつても其角や去來の直弟子の集にあるものは、出典としたものを前に、附註的に、猶一書を後に記し、それ以上は必要を見ないばかりか、むしろ疣贅となるので、これを省略したのである。

一、さうらしい、芭蕉の體臭とでも云ひたい気分はあるが、さうだとは決定されないのは、證據がためのつくまで、これを「考證」として、四季のをはりに附載してある。この考證の句を加へて、一句のかしらへ番號を標し、一千二十六句を以て、芭蕉俳句の定本として、その眞實性を良心的責任を以て推舉する。

一、先案、後案のある句と文、芭蕉みづからの刪存の證されるもの、及び門人の聞書や云ひ傳へに異同のあるものは、文獻的に初出の作を採つたが、「枯枝の鳥」の如き初出の東日記によれば、改作した曠野を除く事となるので、芭蕉の本意にそむくやうだが、これは致し方ないとして、異同考を下巻に添へる。

一、濁點と句讀は私意を以て加へたが、誤字には傍註し、宛字はそのまゝとし、濫りにこれを訂さなかつたから、一概に誤植と見ては困る。「マ、」とあるのは出典通りの意である。平假名を主として、片假名は必ずしも、これを遵守しなかつたが、特に必要と見られるものは、これをあらためないで片假名書きにしてある。

一、本集の出典又は傍證とした書は、たとへ、本集には不必要と見て掲げなかつたものも、研究上の便をはかつて参考書名に收め、編者と年次を註したが、刊記のないものは序跋によつて、その年と假定した書も若干はある。又、索引は俳句全集に限り、紀行その他には及んでをらぬ。

一、本集は昭和廿一年九月稿を脱し、印刷に附する前、福島縣白河の旅寓で一閱し、越えた廿二年十月に至つて校正が出て、廿三年三月校了になるまで、約三年越しになるので、その間にあらはれた新資料を逸したるやの懸念はあるが、見聞の及ぶかぎり校正中に補訂を怠らなかつた。その爲、地平社の迷惑を來したことも尠くないのを恐縮する。

一、猶本集に對して、近くは私の藏書を保管する便宜上、俳句全集の筆寫をされた松崎茂樹君の好意を喜び、古くは三十年前には一般に開放することを避けた東京大學圖書館の古俳書を、一ヶ年に涉つて通覽する便を圖られた萩野由之博士を始め、多くは物故された諸先輩の書恩をこゝに償んで感謝する。一

目次

序	………	一
汎例	………	二
解説	………	

一、前提(七)	二、芭蕉俳句の蒐集(九)	三、作品の年次と區劃(二二)	四、定型、切字、季の問題(三)	五、敬遠せる句と新加入の句(三三)	六、不採録の俳句と其の理由(三三)	七、初案再案の句と異同辯(三三)	八、歌仙の批卷と評語(三三)	九、發句合の判詞と貝おほひ(三五)	十、紀行文學の古典奥の細道(三六)	十一、更科、笈の小文、鹿嶋詣(四二)	十二、野晒紀行から定型律へ(四四)	十三、嵯峨日記稿本と眞實性(四六)	十四、遺語と聞書の吟味(四六)
---------	--------------	----------------	-----------------	-------------------	-------------------	------------------	----------------	-------------------	-------------------	--------------------	-------------------	-------------------	-----------------

本文

芭蕉俳句全集	………	一
春之部	………	三
夏之部	………	三

第三、俳句の再案と其の推敲………三九

第四、連句の考案と附け方………三六

第五、俳諧の制約と叙法………三〇

第六、俳諧の制式と古實………三二

第七、季題と其取扱方………三六

第八、師説と門人の解釋………三三

第九、本式俳諧之次第………三九

芭蕉俳句參考書目錄………三五

季題別索引………三七

芭蕉俳句全集索引………三七

解

説

鑑賞と考證をかねつゝ

勝 峯 晋 風

一 前 提

かうした疑惑に逢着しようとは、芭蕉の俳句に關するかぎり、全く豫想もしなかつた。それは此の俳句全集へ採録するのを見合せた次の三句に就いて、解説に際して起した疑惑である。

春なれやこしの白根を國の花

元祿五年の跋がある句空の『杳原集』の巻頭にかゝげる句がその一である。傍註には「此句、芭蕉翁、一とせの夏、越路行脚の時、五文字、風かほると置いて、ひそかに聞え侍るをおもひ出て」と見える。「一とせ」は元祿二年である。その夏は越路をへて加賀の國に入つてゐる。「こしのしらやま」と稱する加賀の白山法樂の吟であらう。「ひそかに」には句空にだけ知らせた意に解されるが、「おもひ出て」のつぎに「卒爾に五文字をあらたむ」の結びが疑惑を起す。苟も師翁と仰いで、其の句をみだりに「あらたむ」といふのが不遜である。その上に此の句には作者名が無い。芭蕉の逸句としては原作の「風かほる」に還元しなければならぬ。つぎに擧げる許六に與へた新麥の句とは同一に扱へないのである。其の二は即ち、

新麥や竹の子時の草の庵

此の句は許六から野坡へ、自讃の手簡に「翁の雑談に」とあつて、芭蕉が日蓮の「油のやうな酒五升」の語を「御命

講や」の句へ、置き据ゑたことを、許六が看破した返答に、「新麥に竹の子は、季と季のよき取合せものにて候」といふを聞き、「油斷して既に汝にとられ候」と芭蕉が感服して、此の句を「作り、われらに給り候」と傳へるものである。許六の手簡は、後に嘯山が「雅文せうそこ」一、二許と題して天明五年に板行してゐる。許六の語に示唆されて、芭蕉がこれを「作り」これを彼に與へたとしても、代作した譯でない。作句の實は芭蕉に保留されてゐる。併し、これを「給り候」といふ許六から云へば確に讓渡されたに違ひない。『五老井發句集』天保五に拾輯された理由である。作者誤傳ではない。それから又、

野菊まで疲れて蝶の慈童哉

芭蕉

沾徳の『文蓬萊』に斯く明瞭に署名してあるが 附記に「野菊までつかるゝ蝶の羽おれて」と云、第三は芭蕉が句也」とある如く、荷谷の『冬の日』はつ雪の巻に、芭蕉の第三として掲ぐる平句である。芭蕉が歌仙の平句を案じかへて、發句にあつた例はないでない。田熱鐵宮物語元祿八の海くれての巻、名殘の表に「富士の根と笠きて馬に乗ながら」の平句は、貞享元年の歌仙であるが、おなじく四年の尙白選「孤松」ひこまつには一年くれぬ笠着て草鞋はきながら」の發句として發表されてゐる。これと『文蓬萊』の場合は違ふ。かれは沾徳が「芭蕉の句也」から、すぐ語をついで「翻して、今の句になす」と書添へてゐる。「翻して」すなはち翻案者は沾徳である。芭蕉が平句を「ひるがへし」たのではないことは、「今の句になす」の「今」がこれを證する。「後に」とでもあれば格別ながら「今の」は選者沾徳の恣意による。強いては原作を冒瀆した改案である。これが其の三である。

疑惑の三句は全集の考證にも入れず、これを除外したのは、より以上の考證を要しないからである。今、芭蕉俳句全集として右の三句をはぶき、全句數一千二十六句を採擇し、その中で五十三句を考證の部に殘して、確定句、九百七十三句を以て、芭蕉一代の俳句とするまでには、芭蕉の遷化してから約二百五十年のあひだ、遺弟及び後人の吟味と穿鑿、博渉の勞苦なみなみならぬ結果であつて、編纂者ひとりが其の業績を誇るべきではない。

一、芭蕉俳句の蒐集

芭蕉の俳句は文獻に徴して、寛文四年、その二十一歳のとき、伊賀上野の藤堂家中にあつて松尾氏、諱を宗房と呼んだ早期の作を、貞門重頼の『佐夜中山』から發見した『芭蕉俳句定本』の後、約二十五年に涉つて、俳諧古典を漁つてもそれ以前の作に遡れない。元祿七年の十月、「旅に病んで」の一句を絶吟、いはば辭世とするまで、芭蕉は生涯の吟を悉く手記して置くことをしなかつた。否、悉くでは語弊がある。『奥の細道』の本文においてすら、一振の宿で「遊女もねたり」の句を「曾良にかたれば、書とゞめ侍る」と記してゐる。然も「一家に」の此の句は曾良の遺稿『雪丸げ』にも、久原氏祕藏の『曾良日記』にも「書とゞめ」てゐないのである。その若干句が、臆測を許さるるならば『笈の小文』に備忘的に手記されたことと思ふ。去來は「笈の小文は先師自撰の集なり」と證し、彼の句の入集せる數を芭蕉に問ひ、「我門人、笈の小文に入句、三句持たるもの希ならん。」の師の答を得たが、同時に「汝、過分のことをいへり」と叱責されたさうである。支考は『笈の小文』を「是は人／＼のふみの端に、はつ句あり、文章あるものをあつめて、行脚の形見となすべきよし、かねておもひたち申されし也」と解説してゐる。大津の乙州が草稿を手に入れて、寶永六年に板行した『笈の小文』は、卯辰紀行が中心で、これに更科紀行を添へたのだから其の抄録であらう。支考の『笈日記』はそれに因み、亡師の吟蹟を廻ること十ヶ國、遺詠を求めて百六十一句を収めたのである。史邦の『芭蕉庵小文庫』は文章を主として發句も七十八句に及んでゐる。桃隣の『陸奥衛』はこれに劣らず、亡師の四季百句を輯めた功は支考につぐと稱される。許六は李由と共選で『韻塞』に二十七句、『篇突』に二十一句を、所論の引證に師作を掲げるところがあつた。

芭蕉の人格を慕ひ、閑寂な句境を仰ぐ遺弟にとつて、その生前の諸集に發表された作が、いよいよ崇敬性を持つことになるのは當然である。貞門、檀林の徒としての寛文及び延寶時代を除いても、天和三年の『虚栗』には十四句、貞享四年の『續虚栗』には二十六句と漢句一を算し、七部集に於ても元祿二年の『曠野』には三十二句、

純蕉風の基礎たる元祿四年の『猿蓑』凡来選に四十一句、平話の輕みを覘つた元祿七年の『炭俵』孤屋、野には十四句の寡作であるが、同年稿半ばで元祿十一年板行された『續猿蓑』支考補には再び三十二句の多きに達してゐる。

蕉門では最も末弟の風國は、これら諸集に照らして其の集大成を企圖したのである。元祿十一年板の『船舶集』こそ芭蕉發句集の嚆矢にあげられる。許六が『宇陀法師』元祿十一年板に難じた「書々の眞偽を考へず。てには違、書あやまり。」のあることは、『江戸三吟』延寶六の「さぞな都淨瑠璃小哥は爰の花、信章」を知らずして芭蕉に誤り、『炭俵』の公羽岸本氏を翁と見損つた句をそのまま採りなどしてゐるが、許六の「文盲千萬なる事、論ずるにたらず」は漫罵に過ぎるであらう。ただ千春の『武藏曲』は天和二年既に芭蕉翁の肩書を、壯年三十九歳の桃青の號に添へ、蕉風開發の第一書といはれる古典なるにかゝはらず、これを輕視せるにや。抄録に莅んで、

うかれ行月網笠を家として

角止

佗てすめ月佗齋がなら茶哥

芭蕉

斯く二句ならべて掲げてあるのを、「佗てすめ月」まで書き、つぎの刹那には角止の「網笠の窓を家として」の方に逆戻りして、木に竹を繼ぐの愚を演じ、瞬時の後には

佗てすめ月網笠の窓を家として

の一句となす錯覺を敢てしたのは、あながち文盲とは評されないが、刻板の時、校合を疎漏にした責は免れない。許六が『船舶集』の題號を以て「先師伊賀にすめる比、釣月軒宗茂、船舶堂宗房など、書なぐりの反故など拾ひて名附けたるか。」と、揣摩せるは許六の見聞が狭い。「宗茂」の號は芭蕉になく、又、船舶堂は江戸に來つて名乗つたのである。此の點は風國の冤を雪いで置く。『船舶集』の體裁は第一卷は「芭蕉翁道の紀」の題下に「甲子吟行」一三野の本文を掲げ、第二乃至第五卷を「芭蕉菴拾遺稿」の内題を置いて、芭蕉の四季別發句五百餘を登載してゐる。且、風國は漫然、芭蕉の發句を羅列したのでなく、諸集の誤りの訂すべきは訂してゐる。支考の『笈日記』の「渺く」と尻ならべたる田植哉」は、「伊丹の句にして翁にあらず」と否定してゐる如く、伊丹の蟻道の句である。春堂は「鉢扣」正徳五年板の詞書にこの點をあきらかにしてゐる。草土の『根無草』に曲水とあるのは再誤傳であるまいか。

その後、華雀が『芭蕉句選』元文四 年板をあらはしてから、『泊船集』の存在は忘れられて、句選のみが行はれ、其の再

校本も出てゐる程である。收むるところ六百七十一句といふ。貞室の『玉海集』の部立に準じて四季類題とし、欄外

に異同を註してあるから、その吟味のきびしさも知られる。更に積翠の『芭蕉句選年考』稿本の考證で一層の價值附

けを得たが、その前、梅尺の『芭蕉翁發句拾遺』延享二年稿 寶永二年板があり、又、寛治の『芭蕉句選拾遺』寶永六 年板や、康工の『蕉

句後拾遺』安永三 年板などの續貂的補遺が出て、『句選』に對する世評を大いにしたのであつた。明治に至つてからは此

の句選をさし置き、蝶夢の『芭蕉翁發句集』安永三 年板が、土芳筆の年曆別芭蕉句集に基き、年次順に掲載してある故に

信賴され、四季別の同じく『芭蕉發句集』安永五 年板の簡便なことで、再刻本寛永元 年板もあつて、坊間に流布されるので一

般に行はれたのである。所載句は七百五十餘句、量を貪らずして、相當嚴選されてゐるが、然も『小文庫』の「稻妻

やうみの面をひらめかす 史邦」の句を誤入した手落ちがある。佛号、湖中共編の『俳偕一葉集』文政十 年板は體裁と内

容と、確かに芭蕉全集の實を備へてをり、發句は貞門、檀林の諸集まで涉獵してゐるが、宗房の同名異人に氣附かず、

重頼の『毛吹草』正保二 年板に載する宗房の句、芭蕉二歳の時のものを掲げ、立圃の『小町踊』寛文五 年板の宗房は時代錯誤

は來たさな、これが、これ亦、宗房違ひの作を載せてゐる。此の點を除けば『一葉集』は江戸時代、掉尾の善本であるか

ら、明治時代の芭蕉句集には卒然『一葉集』その儘を鰻刻したものさへある。

ここに至つて芭蕉俳句集の完成を期するには、劃期的の編纂方針をたてなければならぬ。その理由は、それが全芭蕉の研究及び鑑賞の基礎となる故である。

三、作品の年次と區劃

芭蕉の俳句を理解するには、其の制作の年次が鍵をおろして來たので、年次の鍵を求めてこれを開かなければならぬ。その鍵は、又、芭蕉の向上をさぐる上にも必要である。芭蕉が風雅の道を實踐するまでには、年次的に梯子を一段づつふんで登る苦勞をしてゐる。その間に其の俳句は變化して行つた。麥水は「世には、はせを七度、變風の人と

いふが、「目のあたり見る所、三度なり。」と概評し、「貞享以前、貞享、元祿の頃と也」と説いてゐる。貞享以前を一括して見るのは無理である。これを年次的に寛文、延寶、天和の三時代に劃さねば俳風の變遷を云ひつくせない。此の年次的の劃期法は常識的で、然も妥當であると思ふ。且、蕉風の根本問題として不易流行説は、諸遺弟の論争するところであつたが、其の流行とは蓋し年次と共に推し移ることである。不易は確乎、流行にかゝづらはない絶對境である。流行は動、不易は靜である。動靜一如の境に入るのが、蕉風の本格的な理想である。これを身を以て體驗し、身を以て風雅を實踐したのは芭蕉である。芭蕉の俳句を年次的に考察すれば、理窟なしにこれが解るであらう。

第一 寛文時代

寛文四年
同十二年

九年間

二十一歳
二十七歳

貞門流、言葉の可笑味 縁語と言掛

伊賀上野の加判奉行、藤堂新七郎家の御納戸方として、微祿ながら大小をたばさむ武士、松尾忠右衛門宗房と名告つてゐた。若い、部屋住みの世嗣の君、主計良忠は、洛の季吟門に入つて俳號を蟬吟と呼ぶ。元服の頃まで宗房はその御小姓として近侍したから、趣味も一致して俳諧をたじなみ、諱の宗房でこれを愛玩したことを思ふ。ここに愛玩といふのは、遊藝として、輕忽にもてあそんだのであつて、多少の教養はともなうにせよ。嚴肅な文學を修行したのでないことを意味する。宗房の句は重頼の『小夜中山』寛文四年板が初見であるが、季吟の『續山井』寛文七年板から其の作を引かう。

夕顔にみとるゝや身もうかりひよん

松尾氏 宗 房

純白な夕顔の花は、暮るるに暑い氣分を爽やかに涼しくする。夏的一天を忘れて、うつかり魂ぬけのした無表情で、その花に見惚れてゐる。率直にさう詠んだのでは、貞門の可笑味を現つた句とはならない。俗語の「うつかり、ひよんとする」を取り入れて、おもしろく一句を仕立てねばならない。そこで「ひよん」の木へおもひをはしらす。「ひよん」は猿飄さるひょうのこと、夕顔と同じく花から飄ひょう型のみを結ぶのである。「ひよん」は飄ひょう（へう）の轉訛音だといふ。夕顔の花をぼんやり眺めてゐたら、うつかり「ひよん」になつた。いや、まだ、なりきらないが、どうやら夕顔とひよん

の双生^{ふたなり}になりさうである。「身も」は見惚れる其の人と、對象の「ひよん」の實とに言掛けてゐる。縁語である。一句として此の言葉の洒落^{しやれ}れが面白いのである。可笑味の表現にある。ずつと時代はへだたるが、一茶の「稻妻やうつかりひよんとした顔へ」の寫實性は此の句に持つてをらない。花が咲かうが、咲くまいが、「夕顔」とよび、「ひよん」といふ言葉の掛合せが、技巧のみがきとして悦ばれたのである。又季吟の『續連珠』^{延寶三}に

さりとはあふて別のうかりひよん

桃 青

此の附句の「うかりひよん」は語義の通りである。「ひよん」の實にはかかり合ひがない。それだけ技巧の點で貞門流とは、やや懸けはなされてゐる。

山邊郡宇知山

うち山や外様しらずの花盛

松尾氏 宗 房

一天の君が「あまが下にはきる義もなし」と、御歎きあつて、笠置山を落ち延び、大和は宇知山の永久寺へ、後醍醐帝はほんの一寸の蒙塵をされた。その宇知山の題詠である。「うち山」と「外様」の對句だけでは慊^{あは}れない。「宇知」の「うち」を「内」に取りなして、いはば永久寺内の櫻を賞したこととし、寺内かぎりの花のさかりだから、「外様」すなはち寺外の者の容喙^{ようゑい}を許さなといふのである。「外様」は源氏の細流に「源の、外様むきにまいる給ふ也。」と註され、封建制の諸藩で徳川に縁なきものは外様大名と稱されもした。貞徳は發句の連俳を「見して解るやうに、俳諧には必ず俳言を要することを提唱する。此の句の「外様」は俳言である。或は「外様しらず」といふ俗諺があつたかも知れないが、重頼の『毛吹草』や皆虚の『世話盡』など、貞門俳書の諺語彙には見あたらない。若き宗房は大和名所の發句、特に「宇知山」の題を課せられて詠んだのである。正辰の『大和順禮』^{寛文十}に出てゐる。ちよつと見たのでは、どこが可笑しいのやら合點が行きかねるが、これは「外様しらず」の語を巧みに裁ち入れて、寺内でこつそり咲くさくらの花を、それが幸ひのよろこびらしく、いひ難しなところに可笑味をふくめてゐる。「外様」は又、「とざま、かうざま」ともつかはれて、外方「そとのかた」とも解されるが、前釋でよいやうである。

寛文十二年宗房は伊賀上野の天満宮奉納、三十六番句合の判詞を試み、『貝おほひ』と題し、江戸へ携へ行くまで、

其の作、四十三句を算するが、縁語中心の可笑味で、貞門流の埒を出なかつた。宗房の出郷は失踪でも亡命でもない。主家を致仕したのは蟬吟が寛文六年に歿し、未亡人は舍弟良重に再嫁した時、懷妊してゐた。嫁して出生した良長は蟬吟の遺孤である。繼父の良重は寛文十年に卒去した。良長は祖父良精の世嗣に内定し、これまで孤忠を盡した宗房は、大いに安堵して主家に骸骨を乞うたのである。

第二 延寶時代

延寶元年
同八年

八年間

三十歳
三十七歳

檀林調 新表現の格調 奇警と含み

江戸で俳諧師となる望みは、はるばる『貝おほひ』をふところにして下つたのでも知られる。出世作の『貝おほひ』は、はやり小唄をもぢつて、道化た戯作的判詞が、大いに人氣を煽つた筈で、實際はさうも行かなかつたらしい。貞門流は既に當世のすたりもので、檀林調の壓倒するところであつた。宗房は一時生活に窮したやうである。關口の水道工事の帳面方を勤めたのも事實であらう。宗房を桃青と改號した頃から、漸く連衆を擁するやうになり、點者たる資格として不文律の萬句興行も試みた。等躬の句(萬士才所載)にその旨を前書にしてゐる。延寶八年『桃青延寶二十歌仙』が開板され、深川に草庵を結び、芭蕉一株を植ゑたので、人々、芭蕉庵と呼び、桃青もいつしか「はせを」を以て名告るやうになつた。桃青の新檀林調は梅翁流とは云へ、阿蘭陀西鶴(犬鳴)や伴天連高政(京)の放逸、無慚の行過ぎでなく、江戸談林松意の一日一日の變化を追ふ飛牀でもない。同志言水の主張する如く、貞門流の古みを滌いで、檀林風の洗禮をうけ、兩者の渾融による新風の樹立にあつた。觀察の奇警と寓話の含みに、其の新風の特種な性格と表現がある。滑稽の分子は解消して、その句表に存しないものが多い。

大比喩やしの字を引て一かすみ

桃 青

磐城平の藩主内藤氏、風虎が六百番の句合を企て、京の季吟、伏見の任口に折半して判詞を乞うた中に見える。延寶五年の催しであるが、季吟も檀林かぶれがしてをり、任口は西鶴と交渉を持ち、兩判者とも純粹の貞門流を維持してゐなかつた。此の句は新風を唱へる前期の作である。「し」の字を引て「は單純な叙景の比喩に見えて、内容に寓話のか